

はじめに

漢文を読む能力、そして漢文の問題を解く能力を身につけるためには、まず文法を習得することが必要であり、また語彙力も必要である。とはいっても、大学入試で必要とされる知識量はそれほど多くはない。集中して取り組みれば、それらは短期間で習得することも可能である。漢文は短期間の学習でかなりの成績の向上が見込める科目なのである。

本書は、漢文を読む上で欠かせない基本的な知識を着実に身につけて行くために、ポイントからドリル、ドリルから基本問題・練習問題、と順を追って学習を進めて行けるような構成になっている。

まず最初に、ポイントをじっくり読んでもらいたい。ここには、再読文字や重要な句形の基本パターンとその代表的な訳し方などが記されている。ポイントの内容を確認したら、それに続くドリルに取り組んでほしい。ドリルを解くことによって、ポイントの知識が確実に自分のものになって行くはずである。解答と解説は、巻末の別冊にあるので、すぐに答え合わせをしてみ、間違えた箇所があったら、解説を読んで、自分が間違えた原因を確認しておこう。

次に基本問題に進んで行く。漢文を始めたばかりの人には、少し難しく感じられるかも知れないが、本文の下の書き下し文・全文解釈や、解答のヒントなどを手がかりにして、問題にチャレンジしてほしい。なお、比較形以降は基本問題を設置していない。

仕上げは練習問題である。練習問題は、実際の入試問題に近い形式で出題している。本文をじっくりと読み込んで、自分の頭で解答を考える

訓練を積んで行けば、漢文の得点力はおのずと向上するはずである。なお、練習問題の中で★印をつけた問題は、比較的高い読解力を要する問題である。これら★印をつけた問題については、ポイント・ドリルや★印以外の問題を先に終えてから、最後にまとめてチャレンジするとうやり方もある。まだあまり漢文の問題を解いたことがなくて、★印をつけた問題が難しいと感じられるような人には、この順番で解いてみることをおすすめする。

本書は、高等学校の国語Ⅰ、国語Ⅱの範囲に含まれる漢文の知識は一通り習得できることを目指して編集されたものである。本書のすべての問題を解き終えた時には、おそらく諸君の漢文の知識量はかなりのレベルに達していることであろう。しかしそれで安心してはいけない。文章を読み解く力はなかなか身につかないものなのである。さらに問題演習を積み、さまざまなタイプの文章題を解くことによって、確実な読解力を身につけることが必要である。そのために、入試頻出問題を集めた標準的な問題集である『入試精選問題集 漢文』、センター・私大に向けて選択式問題に的を絞った『マーク式基礎問題集 漢文』、国立二次試験に向けて記述力向上を図る『得点奪取 漢文』（いずれも小社刊）などへとさらにステップアップして行くことをおすすめする。諸君の真摯な取り組みに期待している。

二〇〇一年一月一日

著者一同

漢文の基礎

漢文は、もともと中国で書かれた文章で、漢字だけで構成され文法構造も日本語とは違う。
 昔の日本人は、これを読み、理解するために返り点・送り仮名・句読点などを用いるようになった。
 これら訓点を用いて読むことを訓読といい、訓読は文語文法に従う。

兎走触株折頸而死

兎^{ウサギ}走^{リテ}触^レ株^ニ、折^{リテ}頸^ヲ而死^ス。

兎^{ウサギ}走^{リテ}りて株^キに触^フれ、頸^{クビ}を折^{リテ}りて死^スす。

ウサギが走ってきて切り株に当たり、首を折って死んだ。

送り仮名 漢字の右下につく。

日本語の活用語の活用語尾や助詞などを補ったもの。

返り点 漢字の左下につく。

日本語と語順が違う漢文を、日本語の語順で読むための符号。

書き下し文

訓読したとおりに書き記した文。

現代語訳

書き下し文

漢文の構造

漢文には、漢文の文法構造があり、日本語と語順が異なる場合がある。漢文の文型を確認しておこう。

1 主 述
兔 走。
ウサギが走る



2 主 述 目
虎 食 百獣。
虎は 百獣を 食べる



3 主 述 補
良薬 苦 於 口。
よい薬は 口に 苦い



4 主 述 目 補
孔子 問 礼 於 老子。
孔子は 礼について 老子に たずねた



5 主 述 補 目
諸葛亮 挑 司馬懿 戰。
諸葛亮が 司馬懿に 戦いを 挑んだ



1は、日本語と語順が同じ文型である。

2〜5は、日本語と語順が異なる文型で、述語の後に目的語や補語がくる。

○目的語や補語から上の述語に返って読む。

○目的語には、「ヲ」の送り仮名がつく。

○補語には、「ニ」や「ト」などの送り仮名がつく。

下の語句から述語（多くは動詞）に返る場合、
述語ニ — 「ヲ」「ニ」「ト」
などの送り仮名がつく。

3・4の「於」は、前置詞の働きをする置き字（読みまない字）。「于・乎」も同じ。 81頁

二 返り点

返り点は、漢文を日本語の語順で読むためにつけた記号である。返り点の種類やつけ方を確認しよう。

1 レ点 一字返る

読_レ文_ム。 文を読む。

不_レ読_レ文_マ。 文を読まず。

2 一・二点 二字以上返る

読_ム漢_ム文_ヲ。 漢文を読む。

使_ム学_ヲ生_ヲ読_マ書_ヲ。 学生をして書を読ましむ。

熟_ニ読_ス漢_ヲ文_ヲ。 漢文を熟読す。

3 上・下点 一・二点をはさんで返る

有_リ上_下読_ム漢_上文_下者_ヲ。 漢文を読む者有り。

不_下常_上有_中読_ム漢_上文_下者_ヲ。 常には漢文を読む者有らず。

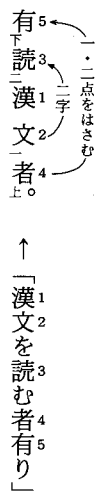
無_カレ_テ下_ニ車_上上_ニ読_ム書_ヲ。 車上に於て書を読む無かれ。

4 甲・乙点 上・下点をはさんで返る

不_乙唯_甲有_下読_ム漢_上文_下者_上而_の已_みナラ_甲。 唯だに漢文を読む者有るのみならず。

返り点のつけ方

下の字から上の字に返る場合につける。



↑「不_ス必_シ読_ム漢_上文_下。」と、さらに二字以上返る場合は、「三」をつける。

↑「読_ム書_ヲ」の「読」から二字以上返る場合。

↑下から熟語に返る場合。

熟語からさらに上に返る場合は、

「不_ス熟_セ読_ム漢_上文_下。」のようになる。

↑「上」↓「下」の途中に寄り道をする場合は、「中」をつける。

↑「読_ム書_ヲ」の「読」から一・二点をはさんで返る場合。

三 書き下し文

書き下し文とは、漢文を訓読したとおりに書き記した文である。きまりを確認しておこう。

1 漢字と仮名を用いて書く

有^レ備^ハ無^シ憂^ヒ。

宋^ニ人^リ有^リ耕^ス田^ヲ者^一。

客^ニ有^リ能^ク為^ス狗^ノ盜^ヲ者^一。

備へ有れば憂ひ無し。

宋人に田を耕す者有り。

客に能く狗盗を為す者有り。

2 助詞や助動詞は仮名書きにする

歳^ハ月^ハ不^レ待^タ人^ヲ。

他^ノ山^ノ之^ノ石^ノ、可^シ以^テ攻^ム玉^ヲ。

如^シ斯^ク而^シ已^ハ乎^カ。

歳月は人を待たず。

他山の石、以て玉を攻むべし。

斯くのごときのみか。

3 置き字（読まない字）は書かない

良^ハ藥^ハ苦^シ於^テ口^ニ。

学^ビ而^シ時^ニ習^フ之^ヲ。

人^ノ之^ノ性^ハ惡^シ明^ラ矣^{ナリ}。

良薬は口に苦し。

学びて時に之を習ふ。

人の性の悪なること明らかなり。



書き下し文の書き方

1 「レ・下・中・三・二」などのついた字は後回しにして、返り点のつかない最初の字から書きはじめる。

有^リ下^下読^ム漢^文者^上。

2 読む順序にしたがって、漢字は漢字のまま送り仮名は平仮名に改めて書く。漢文を読む者有り。

不[↓]ず

可[↓]べし

如[↓]ごとし

之[↓]の

而已[↓]のみ

乎[↓]か

助動詞

助詞

於 前置詞の働きをする。 81頁

而 接続（順接・逆接）を表す。 81頁

矣 断定の意を表す。 81頁